

ミステリ読書案内

2022. 7. 10 発行元

第374号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

今回は売れ筋のベテラン作家のシリーズ物・最新刊が並ぶことになった。毎回安定した内容で、読者を安心させてくれるものばかり。新人作家のライト文芸ミステリを読むのとは随分気分は異なる。

新刊情報をどこで入手？

一番は書店の「新刊コーナー」に並んだ実物を発見すること。これが確実。でも、地方に住んでいると、これがなかなか思うように行かない。大型の新刊書店に行く機会が限られているので、見落としがかなり多い気がする。

第二は新聞広告。これは毎日チェックしているつもりなのだが、私の求めている本の広告は小さかったりするので、気付かないことも多い。一般的に言って、大々的に載ってい

る広告の本を買うことは少ない。単行本は買う作家が決まっているし…。時代小説は読まないし…。

ミステリ文庫本の新刊情報を整理して提示もらうのが嬉しいのだが、ネットとなるとあまりにも膨大に果てしなく続き、見ている途中で「時間がもったいない」と思ってしまう。まあ、検索の仕方が悪いのだと思うけれども。

それについて毎年12月の『このミス』巻末のブックリスト頼りになってしまうという現状。そして全部読むのは無理なので……。

今野敏「石礫 機装235」

5月に光文社から出た本。前作『機装235』は短編集。今回は長編。読みどころのポイントはふたつ。「機装」＝警視庁機動捜査隊は通常は事件の初動対応が業務。捜査本部に参加することはない。でも、本書では指名手配犯を見つける場面からの発展で、自ら進んで事件解決の本流に入り込んでいく「235コンビ」＝高丸と縞長。小さな出来事が大がかりなテロ爆破事件にまで結びついていくことが興味深い。ふたつ目のポイントは相棒「縞長」の特殊な才能。無能な刑事のレッテルを貼られた過去を持ちながらも、見当たり捜査班に移動した後、犯罪者の顔と名前を記憶する特技に目覚めた。今回も縞長の大活躍が見られる。

太田紫織「櫻子さんの足下には死体が埋まっている Side Case Summer」

5月に角川文庫から出た本。既に完結した『櫻子さん』シリーズのスピンオフとして出版されたもの。櫻子さんと正太郎君を取り巻く人達のその後の出来事という設定である。新聞記者の八鍬は蛇事件に取り組むことになり、ホームズの『まだらの紐』を思い起こさせる事件の背景に踏み込んでいく。鴻上百合子は永山のお祖母ちゃんとクリスティの『パートラムホテルにて』に因むシードケーキ作りに挑戦。高校教員の磯崎は蕎子の別荘の庭づくりに力を注ぐ中で近くの隣人の毒殺事件に巻き込まれることに。どの話も、しっかりした考えの上で描かれており、作者の力量に感嘆することになる。留学した櫻子さん、大学生の正太郎君の話も読みたい気がするのだが…。

渡辺裕之「邦人救出 傭兵代理店・改」

5月に祥伝社文庫から出た本。『傭兵代理店』シリーズの最新作となる。今回は、アフガニスタンのカブール陥落、タリバン政権の樹立の場面を取り上げている。ロシアによるウクライナ侵攻が大きすぎてアフガニスタン情勢が話題に乗らなくなってきているが、実際は大問題が続いているのである。アメリカ軍の撤退とタリバンの攻勢についてはほぼ現実の出来事が記されている。日本の対応の遅れについてもその通りだと思う。すべてが「想定外」にならないよう考えていかなければならない。今もって国外に逃れるべき人が残されていることも確か。

小路幸也 「〈磯貝探偵事務所〉の御挨拶」

5月に光文社から出た本。『銀の鯨亭』の御挨拶の続編になる。その中に登場していた磯貝公太が警察を辞め、私立探偵になったところから話はスタートする。作者は「私立探偵もの」を書きたくなったようだ。文体はハードボイルドの描き方ではないが、調査は定番の行方不明者の捜索の話。北海道の話である。

元同僚刑事の鈴元が持ってきた件は同級生の夫が一ヶ月間行方不明になっているもの。併せて〈銀の鯨亭〉の孫に当たる桂沢光も登場し、大学生活を語る章が交互に組み合わされている。磯貝が追っている人物と、光が巻き込まれていく出来事がだんだん絡み合っていくようになり、ある瞬間にふたつが合体することになる。一見偶然のように見えながら……。『小説宝石』に連載されたものだが、編集の意図としても、ミステリ要素を強くしようと考えているのかも知れない。記憶喪失に陥ったままの〈銀の鯨亭〉の叔母・文さんが元気に活躍しているのが嬉しい。結末については……。